

全国から届いたニュースを発信！ ポジティブな視点をはぐくむメディア



今回は東員町の教育現場から届いたグッドニュースを全面特集でご紹介します。人や地域とのさまざまな「つながり」の中で、みずから考えて行動する子どもたちがたくさん育っているようです。



育ててもらった 地元で

2021年の春に始まり、回を重ねながら少しずつ規模を広げてきた「TOIN ひばり教室」は、学校の長期休暇に合わせ、イオンモール東員の一室を借りて無料で行なわれている子ども学習支援教室です。

運営と指導にあたるのは、教員をみざすメンバーを中心とした東員町の大学生と高校生のボランティア。3度目となった今夏の教室では大学生3名、高校生18名で指導にあたり、7日間の期間中に、のべ55名にのぼる小中学生の参加があったといいます。

「前回の参加人数が多かったので、今回は100人くらいの参加を見込んで初めて高校生にも手伝ってもらったんですが、少し読みが甘かったですね」そう笑うのは、代表を務める松永朋樹さん。開催時期によるところも大きかったようですが、とはいえ充分にぎわいです。

開催に際しては東員町教育委員会の協力を得て、町内の小中学校を通じた保護者へのメール配信による告知なども行なわれたそう。後援や協賛としては、ほかに青少年育成会議からテキストや筆記具の購入資金について一部援助があったといいます。

「それからヴィアティン三重さんには、参加いただいた方につけてもらうためのマスクを、こちらからお願いしてご用意いただきました」

行政や地元企業も、活動に共感して応援してくれているということでしょう。

う。開催場所についてもまた、イオンモール東員からの提供です。

「そもそものきっかけは、コロナ禍で成人式実行委員会の会議に参加していたイオンモール東員の方から、なにかさせてもらえることはないかとお声がけいただいたことだったんです」

その際、モール内のスペースの提供などが案として出され、松永さんを含む実行委員で話し合った結果、教室の開催が決定したとのこと。

「生まれ育った地域への恩返しというわけでもありませんが、地元の子どもたちに学習支援ができないかということになったんです」

委員に教員志望のメンバーが複数名いたことから、実践の場ともなるという考えもあったようです。

とはいえ、学生時代の貴重な夏休みに、7日間もボランティアで指導にあたるというのは、並大抵のことではありません。松永さんたち大学生メンバーにとっては就職前の最後の夏。大切な時間を教室開催にあてるからには、原動力となるものがあるはずなんです。

「子どもたちが喜んでくれることが大きな力になりました。初回からずっと来てくれる兄弟の子もいて『また来てくれたね』『来たよ』と期間があいてもおたがい覚えていたりして」

保護者や行政からも開催を希望する声があったこともモチベーションを後押ししたそうですが、なにも持たずからふらっと寄って勉強できるよう、年長から中学3年までのテキストを用意したうえで、夏休みの宿題でも学校で配布されるタブレットの使い方でもなんでも教える、という教室だといいますから、そうした声にも納得です。

そんなひばり教室も、松永さんたち主要メンバーの就職にともない、今後の継続が大きな課題となっています。

「運営を引き継いでもらえる人を探しているところです。現在は東員町在住のメンバーが主体ですが、地域もいなべ市くらいまで拡大して、近隣地域の大学生の運営による教室という形で残せればと考えています」

今後も地元の子どもの身近な学びの場として、また教職を目指す学生にとつての経験の場として、教室が東員町に根づいていくよう、本紙も微力ながら応援していければと思います。

「TOIN ひばり教室」
に関するお問い合わせ

toinbari@gmail.com
代表 松永朋樹まで

次回の学習支援教室は2023年3月に開催。2月にはものづくり教室も開催予定です。





教育のバトン

39年半にわたって東員町の教育に尽力され、2009年から務められていた教育長をこの10月に退かれた岡野譲治さん。1面でご紹介した「To in ひばり教室」にも激励に訪れたという岡野さんですが、なんと代表の松永さんが小学1年生のときの校長先生が岡野さんだったのだとか。

松永さんが来春から教師として教育の現場に立たれるというのも、一線から離れる岡野さんからバトンを引き継ぐかのようで、深い縁を感じます。

教育への想いあふれるおふたりに、思い出から未来への展望まで、たっぷりお話しいただきました。



夢中で挑戦する子に育てる

——おたがいの当時の印象などはご記憶にありますか。

松永 校長先生というと気軽に話にくいというイメージもありますが、岡野先生は接しやすしい校長先生でした。いつも校長室が開いてて、いつでも児童が入れるようになっていて。校長室に行くと、知恵の輪とか、箸を使って大豆を皿から皿へ10秒以内にいくつ移し替えられるか、といったことをやらせてくれるんです。

岡野 松永くんは何回も挑戦する子、という印象でした。ひとつとなつて、かわいらしくて。たしか坊主頭だったよね、マルコメくんみたいな（笑）。それがこんな立派になっちゃって。

——いまでこそ開かれた校長室も多くなりましたが、当時としては時代を先取りしていたのではないのでしょうか。

岡野 そんな大層なことじゃなくて、ぼくは子どもたちが夢中になっている姿が好きなんです。子どもは興味関心をもつと、本気で夢中になる。大豆を移し替えるのも、知恵の輪もそう。大豆のなんて、みんな家でできるんです。ところが校長室で、ストップウォッチで計って10秒以内に、となると、すごいプレッシャーですよ。当然なかなかうまくできない。それで失敗しても、もういっ

ぺんおいでって言うと、子どもたちは何回も来る。繰り返し挑戦する。その姿が見えたし、そういう子たちをいっぱい育てたかったんです。

——かつてそうして校長室へ

来ていた松永さんが、いまでは教える立場

になりました。

ひばり教室にも足を運ばれたそうですね。



岡野 培った技術なり知識を活用して子どもたちを教えるよという発想が、まず素晴らしい。まして大学4年の夏休みですよ。ふつうなら遊びたいものでしょう。それ子どもたちのためになんて、心を動かされました。議会で教育長として最後のあいさつをしたとき「こんな子が育ってるんです」と、松永くんのことや東員第二中学校とヴィアティン三重のことなども話したんですよ。



誰ひとり取り残さない教育

——ひばり教室を経て、いよいよ教壇に立つことになりましたが、なにか抱負などはありますか。

松永 教師になるにあたって大切にしたいのは、取り残さないことですね。自分も教育を受けるなかで、勉強が苦手な子や、なかなか教室に入れない子なども、いっぱい見てきました。そういう子たちを教師が取り残したら、回りの子もそうしてしまう。子どもと子どもをつなげるためにも教師がどう働きかけをするか。子どもがなにを考えているのかをいちばんに考えなきゃいけないのが教師だと思うんです。子どもと対話して意見を聞いて、教師がどう答えるかというのがすごく大事。それを意識しながら、ここ4年くらいはやってきました。

岡野 取り残さない、というのは東員町の16年一貫教育

プランでも重視している部分ですね。どんな条件であっても子どもたちを誰ひとり取り残さない、と最初に決めたいです。そのために必要なのが「教育条件整備」「指導力向上」「外部の力の活用」「保護者とともに」という4つ。これが全部そろわないと、ひとりも取り残さない教育というのは実現できない。「外部の力の活用」というのは、松永くんがやってくれていることも、まさにそう。町内の各学校でも、掃除を手伝ってくれたりとか、縄跳びの回数を数えてくれたりとか、外部の方の力に助けてもらっていることがたくさんあります。



親子で結ぶ基本的信頼感

——うかがっていると、16年一貫教育の理念が松永さんのなかに自然と根づいているかのような印象を受けます。教育者のあいだで理念が受け継がれることはあっても、教わる側が受け取って芽吹かせることは貴重な事例といえそうです。

岡野 松永くんの場合は、彼個人の生き方と、ご両親の子育てによるところが大きいでしょう。子育てにはコツがあるんですよ、圧倒的な。具体的にいうと「短い時間でもいいので子どもの話を聞く」「時間と空間をいっしょに過ごす」「できるかぎり肯定的な言葉かけをしよう」という3つ。これが愛情をかけるということ。それによって基本的信頼感が親子でがっしり結ばれた子は、ほかの友だちや先生とも結べるんです。

——振り返ってみて、松永さんのご家庭ではいかがでしたか。

松永 土日は父親が家にいて、母は専業主婦だったので、恵まれてたと思います。大きくなってから実感したことですが、褒められることも多かった。一方で叱られることも多く、いまにつながっているとは思っています。

——そうした環境で基本的信頼感が育まれたことが、信頼できる仲間たちとの学習支援教室運営、ということにもつながっていったのかもしれない。

岡野 なにがなくても基本的信頼感。それがあって自己肯定感と自己有能感が育つわけです。まとめて「3感」といっていますが、これを獲得した子は、厳しい場面に直面したときにも強いんです。失敗しても、また樂觀的に挑戦できる。壁を乗り越えられる。そういう力がつくんです。



大切なのは意欲と過程

岡野 世界では、とにかくやってみる、かたちにとらわれずやってみる、失敗してもやってみる、というふうになっている。まずはそうした意欲を育てないといけない。意欲を認めて、努力を褒める。才能を褒めたら努力しませんが。そして、結果ではなく過程を褒める。

松永 結果ではなく、どう考えるか、どう導き出すか、という過程については、今後もっと重視されていくようになると思います。

岡野 結果とか点数で一喜一憂してたら世界に通じませんからね。そういう子を育てることが、イノベーションを起こすもと。成果が求められることも、それはあるかもわからん。でも、結果が出ようがダメだが、愛情をかけるのが教育なんです。だから先生や保育士たちには、決して信頼感を裏切らず、有能感を否定せず、愛情をかけるようにと伝えていきます。それが子どもたちが羽ばたいていくうえで大事なことです。

——岡野さんの教えを胸に、松永さんも教育現場で実践されていくと思います。

岡野 期待しています。教育はほんと楽しいですよ。教育の力で社会をよりよく変えていくことだってできるんです。東員町の16年一貫教育はまだまだ途上ですが、これから松永くんのような青年がたくさん育ってきてくれることを楽しみにしています。

東員町で教育を受け、ひばり教室という地域社会への貢献を経て、教職に進む松永さん。いくつかの校長室での時間から、ひとつの想いのもとにすべてがつながっているような印象を受けました。

ちなみに岡野さんは退職後、ひばり教室で指導にあたることに意欲満々のようです。まだまださらに想いはつながっていくようです。



岡野譲治さん（左）と松永朋樹さん（右）



朝日ガスエナジー東
員スタジアムで8月
28日（日）に開催さ
れたヴィアティン三
重のホームゲームで、
東員町立東員第二中学校の生徒たちに
よるソーラン節と吹奏楽が披露されま
した。来場を呼びかけるため、20日（土）
にはイオンモール東員でもソーラン節
を踊り、会場を盛り上げました。

「奇跡の5分間」

東員町 前教育長 岡野 譲治

「生徒のみなさんの吹奏楽とソーラン
の演技を見て、泣きそうになりました」
ヴィアティン三重の後藤大介社長は、
演技が終わって私たちのところに戻っ
てくるなり、そう言ってくれました。

観客のみなさんからの大きな大きな
拍手がありました。後藤社長をこれ
ほどまでに感動させた吹奏楽とソーラ
ンの演技がどうして実現できたのか。
その裏には色々な人たちの熱い思いが
ありました。

東員第二中学校は本年度で開校40年
目を迎える節目の年となっていました。
生徒会や部活動のキャプテン会で話し
合いの場が何度ももたれ、この40年目
をどう表現するか検討が重ねられたそ
うです。その中で生徒のみなさんは「二
中から地域に元気と活気を届ける。二
中ファンを増やし、地域に愛される二
中であり続ける」というテーマを元に
取り組みを進めていたそうです。

一方、先生たちにも強い思いがあり
ました。今の中学3年生の世代は、コ

ロナ禍の影響をもろに受け、身体的に
も精神的にも「我慢」の日々を連続し
て過ごした生徒たちでした。1年生の
時から、遠足も中止、校外学習も中止
卒業式も入学式も制限された学年だっ
たのです。先生たちには、そんな生徒
のために「思い出に残る行事やイベン
トができる環境を作ってあげたい」と
いう強い希望がありました。

しかし、新型コロナウイルスの第7
波が猛威をふるい、地域で行うイベン
トや行事が中止や制限を余儀なくされ
る年になってしまいました。生徒や先
生たちは、それぞれの思いを抱いたま
ま、なかなか実現できない状況が続き
ました。

そんな中、生徒会担当者とヴィア
ティン三重のスタッフが偶然知り合い
であつたことから「せっかくの記念行
事、ヴィアティン三重も何かお手伝い
をさせてもらえないか」というお話を
いただいたそうです。

ここに、生徒の「地域に元気と活気
を届けたい」という熱意、先生方の「生
徒たちの思い出に残る行事を」という
願い、そして「東員町の子どもたちの
笑顔のために役立ちたい」というヴィ
アティン三重の心意気が重なり、夏休
み最後のホームゲームで吹奏楽の演奏
とソーランを踊る機会が実現したのだ
でした。

担当の小川先生の便りでは「この時
間は偶然に偶然が重なり合って起きた
奇跡の時間です。執行部が文化祭を企
画してくれたこと、ソーランが23年途
切れることなく伝統として続いている
こと、人との出会いと繋がり、それら
がすべて重なり8月28日の『奇跡の5
分間』が実現しようとしています。み
んなの一生の思い出に残るよう、最高
のパフォーマンスを地域に届けましょ

う。奇跡のような時間を楽しみましよ
う」と綴られていました。

私たちの町にいる奇跡のような中学
生を誇りに思います。そのような子ど
もたちに育てていただいた先生方や保
護者の方に感謝します。そして、その
ような場を提供してくださったヴィア
ティン三重が東員町にあることを幸せ
に感じます。



一生忘れない 最高の思い出

東員第二中学校 3年生 中島 颯花

ヴィアティン三重とコラボさせてい
ただいたソーラン節、とにかく楽しく
て最高の思い出です。
ソーランを踊ると決まり、たくさん

練習をしてきました。私たち3年生
は、中学校生活ずっとコロナで行事が
なくなったり、休校になったりしまし
た。それも思い出ですが、みんなで思
い出をつくる機会というのが例年に比
べて少なかったと思います。そんな私
たちに、コラボでソーランを踊ると知
らされたとき、すごく嬉しかったです。
また、私は小学校の頃、中学生が

祭りでソーラン
節を踊っている
のを見て「私も
踊りたい!!」と、
とても憧れてい
ました。残念な
がら祭りはなく
なっていました
でしたが、今回こ
うして地域の方
の前でソーラン
節を披露できて
本当に良かった
です。

本番では、練
習と違いたくさ
んのお客さんが
居てとても緊張
しました。でも
全員が練習以上
に声を出し、体
を大きくつかい
今までで一番の

ソーラン節を披露できたと思います。
緊張したけど、それ以上に楽しさや
嬉しさ、感謝や達成感、言葉にできな
い感情など色々な気持ちがこみ上げて
きました。この気持ちは仲間と踊った
からこそこの気持ちだと思います。だか
ら「仲間っていいな」とあらためて感
じました。
今回成功したのは、仲間のおかげで

す。ありがとう。そして忙しい中、企
画してくださった小川先生、協力して
くださったヴィアティンのみなさん、
本当にありがとうございました。短い
時間でしたが、幸せな時間でした。
一生忘れない最高の思い出です。

仲間との一体感

東員第二中学校 3年生 中澤 良太

8月28日、ヴィアティン三重さんと
の共催にて、朝日ガスエナジー東員ス
タジアムで、学校伝統のソーラン節を
踊りました。

8月20日にイオン東員で踊った時よ
り人が多く、雰囲気も違って、緊張し
ながら踊りました。スタジアム中に僕
たちの「どっこいしょ、どっこい
しょ」という声が響き、スタジアム
で踊っていることを実感しました。そ
して、踊り終わった後には、観客席か
ら大きな拍手が聞こえ、今までに感じ
たことがない達成感を感じました。こ
の達成感を感じることができたのは、
今まで一緒に踊ってきた仲間達と「踊
り切ることができた」からだと思いま
した。そして、この機会を通して、仲
間との一体感というものも感じるこ
とができました。今回は3年生全員では
なかったですが、とてもいい夏休みを
過ごすことができました。3年生残り
僅か、仲間を大切にし、もっと関わっ
ていきたいです。

たった一人の ためだけに

東員第二中学校 教諭 小川 翼

東員スタジアムでのソーランの演技、
本当に感動しました。今でも動画をよ

く見ています。先生も生徒のみんなも、
保護者のみなさんも地域の方々も、誰
もが楽しみにしていたイベント。実は
ひそかにもう一人、楽しみにしていた
のが、3歳になるわが娘でした。
前週にイオンモール東員でのイベン
トを見た娘は、お兄ちゃんお姉ちゃん
が踊るソーランに魅了されて以来、家
では「どっこいしょ、どっこいしょ、
そーだんそーだん」と踊る真似をして
いたほど。

当日もリハーサルにまでついてくる
くらい楽しみにしていました。は
しゃぎすぎて転んだ拍子にけがをして
しまい、結局本番を待たずに帰って
いったのですが……。

その後、無事にスタジアムでのソー
ランが終わって家へ帰ると、娘が「ソー
ラン見たかった、見にきたい」と大
泣きしていて、家が大騒ぎ。「終わっ
たんだよ」と言っても聞く耳をもたず、
思いきって生徒たちに「娘がソーラン
見たいと泣いています。今から二中へ
行くので、もし来られそうな人がいた
らきてほしい」と連絡しました。

ダメもとでしたが、なんとその後ほ
どなく、続々と10人以上もの生徒たち
がやってきてくれたのです。

ヘトヘトに疲れきっているはずなの
に、娘一人だけのためにソーランを
踊ってくれている生徒たちの姿を見て、
感動のあまり泣きそうになりました。

3歳の娘は、自分のためにみんなが
集まってくれたことなんて、もちろん
わかっていません。でも、あのときみ
んなが集まって踊ってくれたことは、
きつと覚えているでしょう。

もう少し大きくなったら、きちんと
娘に伝えようと思っています。パパ
の教え子たちがあなたのためだけに、
ソーランを踊ってくれたんだよって。

つながる
地域産業

農業を核としたまちづくりを見ず、農地を有効活用した大豆づくりによる町の活性化を目指す「TOINマメマチPROJECT」。
東員町の特産品として根づきつつある大豆の栽培に、稲部小学校では全校をあげて取り組みはじめています。
収穫時の学年を超えた交流のようす、とれたての枝豆のおいしさ、さらには枝豆の気持ちをつづったもので、児童のみなさんから
作文が届きましたので、こちらで一部をご紹介します！

新たな伝統 「マメマメ大作戦」 始動！

稲部小学校 マメマメ大作戦 部員

今年度からスタートした「マメマメ大作戦」。全校で大豆を育てよう！

全校児童を赤白青黄の4色の縦割り班に分け、学校の畑に大豆の種を植え付けてから、90日ほどで枝豆に成長します。しかし今年は生育が芳しくなく、収穫が予定より10日ほど遅れ、10月中旬に枝豆として収穫を行いました。

1人につき1本を畑から引っこ抜くのですが、根がしっかりと張っていて抜くのにひと苦労。でもそこは稲部っ子たち、低学年が抜くのに苦労していたら高学年が「手伝おうか」「大丈夫？」と声をかけて2人で協力している姿があちこちにありました。また、土から引き抜くのはそんなに時間がかかりませんが、1株に150〜200ものさや(枝豆)がついているので、一つ一つさやをもぎ取るのが実は大変でした。

「マメマメ大作戦」の取り組みで、子ども同士の関わりがたくさん見られ、終わってみれば一つの班で10kgほど、合計40kgの枝豆を収穫することができました。その40kgもの枝豆を保護者の方の協力のもと、大釜を使って茹でていただき、お昼の給食時には美味しく完食することができました。

この稲部小学校の縦割り活動「あさがお」の取り組みは、ずいぶん昔から実施されているもので、「あ..あかる」「さ..さわやかに」「が..がんばる」「お..おもいやりをもって」の意味があり、子ども同士の関わりを深めるとともに6年生のリーダー性を育み、「コミュニケーション能力や社会性、やればできるという自己有能感を高めるために取り組んでいます。具体的には、1週間に1回「あさがおタイム」の時間を取って、異年齢で遊ぶ時間を設けていたり、全校児童による作物づくり「マメマメ大作戦」を実施したりしています。

枝豆の次は「大豆」の収穫です。どの子も今から大豆の収穫を楽しみにしています。



えだまめ マメマメ

稲部小学校 2年生 安藤 湊一

10月12日、マメマメ大作戦で、えだまめを収穫しました。

ぬくのがむずかかったけど、うれしかったです。

きゅう食の時間、ボランティアさんが、ゆでてくれたえだまめを食べました。すごくおいしくて、つい、「めっちゃうくおいしい！サイコー！」と、言っていました。もう、おいしすぎて何日も食べてたいと思いました。おいしかったです。



大豆くんから見た世界 「マメマメ枝豆会へん」

稲部小学校 3年生 夏目 朱綾

今日はマメマメ枝豆会、ぼくたち枝豆にとってさい大のピンチがおそいかかる、おそろしい日だ。今日は大ぜいの人が来て、枝豆をしゅうかくする。中にはテレビカメラを持っている人がいる。

ぼくは、しゅうかくされないようにしやがんだ。

一年生と二年生がしゅうかくした後、に、ひげきはおこった。

三年生に、ぼくの目の前の枝豆がひっこぬかれた。もうだめだと思ったら、うんよく時間になって帰っていった。

ぼくは、もっとせいちょうして大豆になってみたい。



マメマメ枝豆会

稲部小学校 6年生 小川 蒼馬

ぼくは、マメマメ枝豆会をして感じたことが三つあります。

まず一つ目は、他の学年と交流を深められたということです。ぼくたちは一年生の子のサポートをしてあげて、さらに仲良くなれたと思います。

二つ目は、自分たちで長い年月かけて作った枝豆を、おいしくいただけということです。草ぬきや「てきしん」、いろいろなことをして作った枝豆を自分たちで食べて、やったかいがあつたなと思います。うれしかったです。最後は、大豆の時もがんばりたいと思ったことです。枝豆がおいしくいただけだったので、大豆の時もできるようにがんばりたいと思いました。

マメマメ枝豆会が、がんばれたので、大豆の時はもっとがんばりたいです。

マメマメ枝豆会

稲部小学校 6年生 高木 煌矢

ぼくは、一昨日の一時間に全校色別で枝豆をぬきました。黄色Bの子と一緒にしました。

一人一本しかとれないので、豆がたくさんついているものにしました。それを二年生の子とぬきました。

枝についている枝豆をとるのには、すごい時間がかかりました。たらいに、まんたん入りました。

その後は、来てくださったお母さん方にゆでもらいました。

給食の時間になべMAXの豆がとどいて、こしがぬけるほどびっくりしました。でも、それをみんなで食べ切りました(合計六百は食べました)。その後お腹がはちきれそうでした。でも、とってもおいしかったので、また食べたいです。



投稿募集

投稿先
(お便り)
〒511-0255
三重県員弁郡東員町大字長深 3393
グッドニュース新聞社 記事投稿係
(メール)
info@goodnewspress.co.jp

とういんグッドニュース新聞は、全国から届けられた身近なグッドニュースでつくられる新聞です。健康と活躍のまち東員町から、毎月ポジティブな話題を発信しています。ぜひ、あなたのまわりのグッドニュースをお寄せください！

(ホームページ) (Facebook) (Twitter)



投稿の際はタイトル、お名前(ペンネーム)、ご住所、年齢、ご職業をお書き添えください。掲載にあたっては事前にご連絡を差し上げます。

編集室より

今回は「つながる教育」をテーマに、さまざまな教育現場でのグッドニュースをご紹介しました。初めての特集号となりましたので、記事へのご感想やメッセージはもちろん、紙面づくりに対するご意見なども、ぜひお寄せいただければ幸いです。

次号はいつもどおり投稿記事を中心にお届けします。新年号ということで、1年を振り返ったグッドニュースなどもお待ちしております。来年もみなさんの身近に素敵なニュースのあふれる年になりますように。どうぞよいお年をお迎えください！